佐口　透著
新疆民族史研究

澤田　稔

著者佐口透氏は、モンゴル帝國期以降一九世紀までの中央アジア史、殊に一八―一九世紀の新疆（東トルキスタン）の歴史に多方面から精力的に光を當て續けられている先達である。氏の廣い視野と該博な知見はすでに概説書『ロシアとアジア草原』（吉川弘文館、一九六六年）に如實に示されており、同書は一五―一六世紀以降の中央アジア史の魅力あふれる入門書になっている。

本書『新疆民族史研究』は、前著『一八―一九世紀東トルキスタン社會史研究』（吉川弘文館、一九六三年）以後に發表された論文七篇の再錄・補訂とともに、新たな研究を加えて編集されたものである。序文に續く本文は第Ⅰ部から第Ⅳ部に分かれ、地圖・系圖等一〇種の圖版を含み、卷末に文獻略號表と行き屆いた索引（ローマ字・漢字・日本文）が附されている。内容目次は次のとおりである（節・項は後述する）。

第Ⅰ部　甘肅の少數民族
　第1章　サリクニウイグル族の歴史と社會
　第2章　サラール族の歴史と社會
第Ⅱ部　トルファン地域社會
　第1章　近代トルファンの政治と社會
　第2章　清朝のトルファン支配
　第3章　吐魯番郡王領の構成
　第4章　トルファン再發見
第Ⅲ部　イリのタランチ社會
　第1章　ジュンガル支配時代の「ブハーラ人」集團
　第2章　イリのタランチ回屯
　附論　新疆における回民
第Ⅳ部　カザーフ―ハン國と清帝國
　第1章　カザーフ草原の政治的變動
　第2章　カザーフ族の種族構成
　第3章　タルバガタイ邊境のカザーフ遊牧民

本書で扱われている研究對象の地域は、サラール族（現在の撒拉族）の住む現在青海省の循化から、サリクニウイグル族（現在の裕固族）の生活する甘州・肅州近邊、そしてトルファン盆地、イリ谿谷、ジュンガル盆地西邊、さらにソ連邦のカザーフ草原にまで及ぶ廣大な範圍である。そして、分析視角は、政治史、種族史・民族史、地域史、社會經濟史と多様である。一方、民族的に見れば、テュルク系諸民族ないし同諸民族居住の地域に焦點が据えられている點に統一性が見られ、時代的には、清朝の東トルキスタンにおける比較的安定した統治期間である一七六〇―一八六〇年を中心にして、その前後にも多く敍述が及んでいて、各民族の一貫した民族史ないし地域史の意圖されていることが看取される。但し、第Ⅰ部から第Ⅳ部までの各部はそれぞれ個別のテーマを追究したものであり、本書全體の内容をまとめて紹介することは不可能であるので、第Ⅰ部から順に内容を個別に紹介し、氣付いたことを記したいと思う。

第Ⅰ部の第1章と第2章はそれぞれ個別の二民族の種族史であ

る。第1章は「1サリク＝ウイグル族の發展」「2集團組織――otok 制」「3移住傳承」の三節より成る。

第1節は、元末明初期におけるサリク＝ウイグル族の分布地域（敦煌の南方からロプ＝ノール地方にいたるツァイダム盆地の北邊）を確認し、一五二九年における沙州（敦煌）西南邊から明朝領域内の肅州・甘州への移住、ジュンガルへの服屬、一六九六年における清朝への歸順などの歴史的變遷を解明しつつ、一七世紀末以降における肅州地區と甘州南山地區での分布狀況（集落名・住牧地・頭目名・集團名・人口など）を清朝史料（主に地方志）に基づき整理している。

第2節は、一九世紀末から今世紀中葉にいたるロシアやヨーロッパの探檢家・人類學者・言語學者の調査資料に依る諸集團のオトク（集團・分派・區分）名と氏族名の分析である。分析結果より Yögur（Yughur, 現在の裕固）族はテュルク語を話す Sarö Yögur（Sarigh Yughur）族とモンゴル語を話す Shira Yögur 族に二大別され、前者は肅州地區に住み、Yaghlaqar と Khurungut の二オトクよりなり、後者は甘州南山地區に住み、五オトクよりなること、Yögur 族は全部で jiti otok（七オトク）とも呼ばれていたことが明らかにされている。

テュルク語を話す Sarö Yögur 人が一三世紀以來のサリク＝ウイグル族の系統を引く中核集團であろうとの說明は首肯されるが、モンゴル語を話す Shira Yögur との民族的一體性の有無について疑問を感じた。

第3節は、第2節で言及した現地調査者達の收集した口碑資料に含まれる Yögur 族の移住傳承（Sidzo·Khadzho という場所から甘肅へ移住して來たという傳承）のヴァリアントを、現代裕固族の口頭傳承を含めて檢討し、史實の反映を探っている。

甘肅地方へ移動した古代ウイグル族の一派であると推定され、また、言語學的な面からも注目されているものの、明代・清代におけるその活動や內部組織についてほとんど知られていなかったサリク＝ウイグル族の種族史を多方面より檢討されたことは貴重である。

第2章は「1循化サラール族の形成」「2移住傳承」「3起源問題」「4社會制度――土司と工」「5イスラム制度」「結語」より成る。

第1節は、『循化志』（一八世紀末に編纂されたと見られる）に記錄された循化サラール族の起源傳承（韓寶なる人物が洪武三（一三七〇）年に撒喇爾（Salar）族を率いて明朝に歸附して、循化に定住して始祖となったこと。撒拉爾族は哈密より移住し、洪武三年以來、循化に定住したこと）を紹介し、史實としての蓋然性を考察している。

第2節と第3節は、「サラール族の先祖が西方のサマルカンドより移住して來て、明朝の洪武三（一三七〇）年に循化に定住した」という要旨の傳承の詳細な內容を九篇の移住傳承（一九世紀末以來のロシア・ヨーロッパの現地調査者達による採錄および最近の中國の研究書に收められたもの）に依り紹介し、東方移動の發端、經路、循化への定住についてその歴史性を檢討する。

以上の三節は、循化定住以前のサラール族の起源と移住を傳承上より考究したものであるのに對して、以下の第4節と第5節は、循化定住以後、特に清朝による循化營設置（一七三〇年）以後におけるサラール族の社會と宗教についての研究である。

第4節は「(1)土司」「(2)工」「(3)村莊」の三項より成る。第(1)項においては、明朝から撒喇族土官の職を得た韓寶以後、代々土司を襲職したその子孫の二家系、すなわち長房と次房の系譜が示され、韓炳（長房）・韓大用（次房）の土千戸敍任（一七二九年）、循化營の設置という清朝統制力の浸透が語られる。

第(2)項においては、主要な村落「莊・溝」が一七三〇年に「工」となり、「十二工」に編成され、さらに一七八一年のサラール新教徒の亂の後、清朝により「八工」に編成替えされた經緯が、「工」の構成名稱の變遷とともに檢討される。また、「十二工」・「八工」がそれぞれ東西（上下）の二部に分かれ、雙分的な構造を持つことを明らかにする。さらに、循化地方の對岸にあたる黄河北岸に住むサラール族が「外工」と呼ばれ、循化のサラール族（「十二工」「八工」）が「內工」と呼ばれていた事實に注意を喚起する。

第(3)項においては、循化サラール族の五八の村莊が所屬の「工」ごとに整理され、サラール八工の地理的位置關係が示され、サラール語地區名が紹介されている。

第5節は、サラール人名に見られるイスラム名を指摘し、大小の清眞寺（モスク masjid）五九座の存在、清眞寺の宗務者、祭典について解說している。

「結語」は特に、循化サラール語の起源をトルクメン＝サラール族に結びつけるE. R. Tenishevらの說を紹介し、ホラズム地方のSalur（Salor）部族が內サロールと外サロールの二集團に分かれていることと、循化サラール族の內工、外工の制度との關連性を推測している。

循化サラール族は、清代の中國西北部で勃發したムスリムの諸反亂において歷史の表舞臺に登場した。本章は、それらの反亂史とは別の觀點からサラール族に關する內部的問題を取扱い、種族史の再構成に大きな貢獻をしている。

但し、循化定住以前については、傳承以外の實證史料による裏付が必要である。また、史料上の制約により「工」の機能について說明されていないため、サラール族社會の構造が理解しにくくなっているように思う。佐口氏は「工」の語義についての氏の舊說（kung（工）が「部族」を意味するアラブ語 qaum から來たという說）[1]を確實とはいえないと本書では保留し、「城堡、城鎭」と解釋する說を紹介している。一方、佐口氏は言及していないが、片岡一忠氏は、「工」の機能が元來の「族的集團」から「(行政)村落」へ變化したと推測している。[2]

次に、細かいことであるが、六二頁の「ムハンマッドの子孫〔Sa'id 家をさす〕」の Sa'id は Sayyid とせねばならないし、七四頁の「外利（wali, 聖者）」も、聖者ならば wali ではなく、wali であろう。

第Ⅱ部においては、トルファン盆地の地域史が、主として一七―一八世紀の同盆地をめぐる政治史を背景にして展開される。

第1章は「1トルファン盆地の開發」と「2トルファンと中華王朝」の二節から成り、清朝支配以前の時期を扱う。第1節においては、一三世紀より一八世紀初頭におけるトルファン盆地の諸城邑の存在、その規模、定住生活の實狀が、同盆地支配者達の變遷と絡めて明らかにされている。

第2節は、東チャガタイ＝ハン家の系譜を引くトルファン＝ハン家の清朝への遣使入貢（一六四五年から一六八六年まで）とその背

景、同ハン家の河西の回民反亂（一六四八—四九年）への參加、一七世紀末における同ハン家の衰微、清朝によるその末裔の保護などを、清朝史料とバルトリド抄譯の現地史書『カシュガル史』との對比を軸に描いている。

第2章は、一八世紀前半において清朝がジュンガル勢力に對抗してトルファン盆地に軍事的に進出した時期を扱い、現地の有力者額敏和卓（Īmīn Khwāja）の清朝への協力、そして、その結果としての清朝支配下における吐魯番郡王領の成立事情を詳論する。

「1トルファン盆地の政治的變動」において、ジュンガル侵攻に對する清朝軍のトルファン盆地への派遣（一七一七年）とその屯田經營、ジュンガルの策妄阿喇布坦（Tsewang Araptan）との和議（一七二五年）、トルファン人約六五〇人の肅州への移住（一七二五—二六年）、ジュンガルの噶爾丹策零（Galdang Tsering）の侵入と清朝軍勢による撃退（一七三一・三二年）について述べられる。

「2トルファン住民の移動と復歸」においては、一七三二—三三年に額敏和卓に率いられた一萬人前後のトルファン人が清朝の政策に從い、ジュンガルの危害を避けるため瓜州に移住した經緯、瓜州での生活狀況が明らかにされる。

「3吐魯番郡王領の成立」では、額敏和卓が清朝のジュンガル征討に參加し、一七五六年に瓜州からトルファン盆地に歸還して同盆地全域の支配者となり、吐魯番郡王家の始祖となった經過が辿られ、一七六一年までに瓜州と肅州から歸還したトルファン人への清朝駐屯軍屯田跡地の返還についても檢討される。

第3章は「1吐魯番郡王家の變遷」「2吐魯番郡王領の社會制度」の二節より成り、ルクチュン城を王都とした吐魯番郡王家の歴史を二〇世紀初頭まで辿り、その支配地域の内部狀態に論及する。

第1節は、初代から第九代までの吐魯番郡王の襲位と事蹟、郡王領の變遷を扱う。第二代郡王素賚瑞（Sulaimān）の失脚に伴ない、一七七九年に吐魯番直隸廳が置かれ、トルファン盆地西半部がその直轄となり、東半部が吐魯番郡王領になった事實が闡明されている。

第2節においては、ロシアの東洋學者 N. Th. Katanov が一八九一—九二年にトルファン盆地で採錄した口碑資料の中から、當時のトルファン盆地の行政區域、Lükchüng 王と呼ばれた吐魯番郡王家の公的地位・領主權などの實態、役人の職掌、農地制度などについての記事が紹介される。

第4章はトルファン城（回城・漢城）とイスラム記念物についての地誌的研究である。「1トルファン城の成立」「2現代のトルファン」「3トルファンのイスラム遺跡」の三節より成る。

第1節と第2節において、トルファンの回城（舊城）と漢城（新城）の清朝統治開始直後における改修（回城、一七八一年）と新築（漢城、一七八〇年）の事實が究明され、二〇世紀中期までの兩城の規模・プラン・地理的位置關係などが解明される。

第3節は、トルファン漢城近傍にある Medres-i Maimūne 寺院と附屬の光塔（いわゆる蘇公塔）の建立（あるいは修建）を記念して建てられた石碑の文面を檢討し、さらに各地のイスラム聖墓（マザール）について解説している。

以上のようにトルファン盆地の地域史を主に政治史の變遷、清朝支配下の統治狀態、城邑の都市化の面から追究された第Ⅱ部より、

我々は近代トルファンについて豐富な情報を引き出すことができる。例えば、吐魯番郡王家の始祖である額敏和卓の家系がヤルカンド出自のイスラム聖職者の家系であるらしきこと、アスターナにある Alpata Khwāja mazār が吐魯番郡王家の墓所になっていたことの指摘は興味深い。東トルキスタンにおいてマザールが熱心に崇拜されていたことを念頭におけば、それらは、吐魯番郡王家の清朝權力に後押しされた政治的性格とはまた別の社會的性格を考える上で重要な手がかりを與えているように思われるからである。

なお、望蜀の言を呈すれば、トルファン城市のトルファン盆地諸城邑に對する經濟的位置が今一つ判りにくく、トルファン盆地地域の地域的一體性が十分には明瞭になっていないことである。また、細かいことであるが、一五七頁の「これらの土地の白水の源」という譯文は判然としない。原文 bu zamīnlarning aqīn sularining bulaqlarining baši は「これらの土地の川や泉の源」と譯すべきであろう。なぜならば、ヤーリングの辭書によれば、aqīn su は stream, river とされているからである。[3] なお、一九四頁一七行目の「人々は」と「草稅として」の間に原載論文四三頁の一行「一〇〇頭につき二頭の羊と二枚の毛氈を zakat〔寄捨。家畜稅〕として差し出す。人々は羊一〇〇頭につき一頭を牧」が抜けている。

第Ⅲ部は、ジュンガル遊牧國家による定住民の草原への強制移住を概觀し、清朝によってジュンガリアのイリ谿谷に強制移住させられたウイグル人のタランチ（農耕奴隷）としての生活狀況の實體に迫っている。

第1章において、ジュンガル遊牧國家によってその領域に強制移住させられた「ブハーラ人」（ここでは中央アジアのテュルク族、特にカシュガリアのウイグル人を指す呼稱であり、ブハーラ市の住民という意味ではない。）が總合的に取り上げられる。「1ブーチンとタランチ」は、ウイグル人を主體とする「ブハーラ人」が包沁（pūchin, 砲士）、塔哩雅沁（tariyachin〜taranchi, 農耕奴隷）、伯德爾格（bederge＜bezirge, 貿易商人）などとして使役された事を解說し、「2アマーナト（人質）」は、ジュンガル遊牧國家の定住社會支配の一方法である人質制度の具體相を提示する。

第2章は「1回屯の成立過程」「2回屯の村落分布」「3回屯の生產關係」「4回屯の統治制度」「結語」より成る。第1節は、ジュンガル遊牧國家を滅ぼした清朝が、イリ駐屯兵の食料を補給するためにジュンガルのタランチ植民制度を踏襲して、一七六〇年からウイグル人をイリに強制移住させて屯田を營ませた經過をタランチ農民戶口數の增加（一七六八年に約六〇〇〇戶）を中心に考察する。2・3・4の三節においては、その回屯（タランチ屯田）の所在地、一八三〇—四〇年に行われたタランチの荒地開墾と新入植、回屯での播種量・收穫率・徵糧額が檢討され、回屯統治のために施行された「ベク官人制」が概觀され、その長官である阿奇木伯克（アーキム・ベグ）や清朝の壓制下における農奴的な生活狀況が語られる。

附論は「1回民商人」「2回民兵士」より成り、回民（中國ムスリム、ドンガン）の一七六〇年から一八六〇年前後にいたる期間の東トルキスタンにおける商業活動・土着化などについての個別具體例を提示し、天山南路へ派遣された綠營兵の中に含まれていた回民兵士の動靜、天山北路のイリ、ウルムチ地方に設けられた兵屯、戶屯と呼ばれる二種の漢族屯田の中の回民について考察する。

この第Ⅲ部の中心的論考は第2章である。第1章はその序論的意

味合いを有しており、ジュンガル王國と「ブハーラ人」との關係が全般的に説明されているのではなく、むしろ王國領内への強制移住の側面が強調されている。それは、第1章が羽田明氏の論文を受け[4]つぎつつ、それを補うものとして書かれているためでもあろう。

第Ⅳ部は、一七世紀から一八世紀五〇年代までのカザーフ族をめぐる政治史、大オルダ＝カザーフ族の種族史、清帝國の國境線であるタルバガタイ邊境におけるカザーフ族と清朝當局との交渉史を描く。

第1章は「1ジュンガルの西方進出」「2カザーフ民族社會の變動」「3清朝とカザーフ＝ハン家」の三節より成る。第1節は一七世紀から一七四〇年代までにおけるジュンガル軍のカザーフ草原・中央アジアでの掠奪・征服などの軍事活動を、カザーフ族との敵對關係を主軸に編年的にまとめ、第2節は一七三〇年代におけるカザーフ族、大・中・小三オルダ（それぞれカザーフ草原の東南部、北中部、西部の種族連合・地域集團）の政治的分裂狀態とロシアへの朝貢・臣從の事情を明らかにする。第3節においては、一七五五・五七年に清朝軍がジュンガル王國を倒した時期前後のカザーフ草原、特にシル川中流域の二都市トルキスタン、タシュケントにおける政治狀況が、カザーフ王公の清朝への名目的藩屬とともに考察される。

本章は主に、タウケ＝ハン（一六五一／五二―一七一七／一八年）沒後におけるカザーフ＝ハン國分裂期の複雜な政治史を概觀している。その中でも、ジュンガルの侵入によりカザーフ王公がロシアに保護を求めた事情やシル川流域の都市をカザーフ王公が支配した實狀についての敍述は內容豐富である。

第2章は「1ウイスン種族史」「2大オルダの種族集團」から成る。第1節は大オルダ＝カザーフ族の總稱となったウイスン（Üisun）族の起源をキプチャク＝ハン國におけるHüshin（許兀愼）に辿り、モンゴル帝國解體後のウイスン種族の分布を解明して、カザーフ民族形成におけるその重要性を指摘する。第2節においては、一九世紀初頭における大オルダ＝カザーフ族の有力な五つの種族集團とその下方分派（部族または氏族にあたる）の名稱・分布狀況が明らかにされる。Dulat種族がモグール＝ウルス（東チャガタイ・ハン國）のDüghlätの後裔であろうとの指摘と考察は貴重である。カザーフ民族形成史の研究に對する本章の寄與は極めて大きい。

一七五五・五七年にジュンガル王國が清朝軍によって崩壞し、その故土ジュンガリアが清朝領となった結果、ジュンガリアと境域を接するカザーフ族と清朝との接觸が始まった。

第3章では、その兩者の政治的・外交的關係が「1東方カザーフ人と清帝國領邊境」「2タルバガタイ邊境線とカザーフ遊牧民」「3清朝藩屬としてのカザーフ王公」の三節において檢討される。第1節は一七六〇年代におけるカザーフ族の清帝國邊境への移牧狀況と清朝の對應を「(1)セミレチエ」「(2)タルバガタイ邊境」「(3)アルタイ・ウリヤンハイ地方」の三地域ごとに概觀する。

第2節は「(1)卡倫（karun）線とカザーフ移牧問題」と「(2)カザーフ遊牧民の冬營地」の二項に分かれ、ザイサン＝ノール西岸からタルバガタイを經て、イリ邊外に至る國境線を形成した卡倫（國境の警備處）の配置が地圖上に再現され、カザーフ遊牧民が冬營地の確保のためにその國境線を越境して、タルバガタイ境域に移牧せざ

るを得なかった實情、そして清朝當局が租馬を徴收してその越冬を許した事が明かにされる。

第3節は「(1)邊境カザーフ族の系統」「(2)カザーフ王族の系統」「(3)東方カザーフ族のロシア化」の三項から成る。イリ、タルバガタイ邊境附近に住牧した種族集團名、それらを統制下に置き、清朝の藩屬となったカザーフ王族の名と系圖、一九世紀初頭以後における大オルダ＝カザーフ族のロシアへの臣屬について整理されている。

カザーフ遊牧民のタルバガタイ卡倫線内への冬季移住についての記述は、四〇二頁の地圖「一九世紀前半期のタルバガタイ邊境」と併せて讀み進むと眼前に移牧の光景が浮ぶようである。貧窮遊牧民の冬營地での恒常的住牧という事實は注意を引く。

以上、本書の内容を要約し、筆者なりの感想を記してみた。本書は木目のこまかい實證論文の集成であり、擧げられた歴史データは清朝實錄、方略、地方志を始めとする漢文史籍、對カザーフ關係のロシア外交史料、現地史書等の一次史料に立脚している。さらに、一九世紀末以來の現地調査者達の調査成果が隨處に活用されていること、殊に採集された口頭傳承が歴史資料として檢討されていることは特筆に價しよう。本書には、そのような貴重な歴史データが集積されているのである。

本書を通讀して、著者佐口氏の研究業績がきわめて獨自性の高いものであることを再認識した。著者の獨壇場の感さえするのである。明清漢籍を博捜し、それを機軸にして、歐露の研究・調査成果を連動させるという手法が驅使されているのである。末筆ではあるけれども、著者の開拓者的研究活動より常に恩惠を受けている者として深甚なる敬意を表する。

註

(1) 佐口透「サラール種族史の諸問題——資料と文獻」『金澤大學法文學部論集（史學篇）』一四、一九六六年、三五頁。

(2) 片岡一忠「サラール族史研究序説」『大阪教育大學紀要（第Ⅱ部門　社會科學・生活科學）』第二八卷第二・三號、一九八〇年、一〇二—一〇四頁。

(3) G. Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, Lund, 1964, p. 279. なお、G. Raquette, *English-Turki Dictionary Based on the Dialects of Kashgar and Yarkand*, Lund, 1927, p. 114 に Stream の譯語として aqïn su（アラビア文字）が擧げられている。

(4) 羽田明「ジュンガル王國とブハーラ人——內陸アジアの遊牧民とオアシス農耕民——」『東洋史研究』第一二卷第六號、一九五四年、三三—五二頁（羽田明『中央アジア史研究』京都、臨川書店、一九八二年、二五二—二七四頁）

一九八六年二月　東京　吉川弘文館
A5版　x＋四五九頁　九六〇〇圓